
月語り - 花の章 -

小春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月語り - 花の章 -

【Nコード】

N2405Z

【作者名】

小春

【あらすじ】

時代は平安時代初期。主人公、加賀美は大納言の六の姫として生まれるが、母の身分が低い為、神官の元に預けられ、父と大納言が他界した後、巫女となる。加賀美は他人にはない能力を、持っていた。加賀美をいつも守ってくれる、渡り、従兄の継俊と共に、呪術師の真部人麻呂に立ち向かう。ちょうどその頃、都では月の姫という得体のしれない姫に、貴族の男君が求婚しては、無理難題を押し付けられ、臥せる者まで出ていた。町の衆では、土堀修理の九、屍運びの蓮などに出会う。加賀美と渡り、継俊の三人の心の動き、触

れそうで触れない微妙な関係。蓮の初恋のような、でも、まだ恋ま
でいらない感情。登場人物の心が、事件と共に動く。

序（前書き）

初めて投稿しますので、読みづらい箇所があるかとは思いますが、ご容赦ください。

序

序

なぜ、こんなにも胸騒ぎがするのか。

今宵の満月のせいなのか、それとも・・・。

そこまで思考を巡らしたとき、風が動いた。

風は吹くものだとは限らない。

人間の気配を感じるとき、風は動く。

彼女は振り返りもせず、呟くように言った。

「どうしました、渡り《わたり》。」

それが例え呟かれたものであっても、月明かりが届かぬ茂みに向かって放たれたことは、その男にはわかったのであるう。

茂みの中から、若く凜々しい男が現れた。

二十代半ばを少し越しているであろうか、肩まである髪は一つに束ねられ、薄い緑色の単に、それより少し濃い緑色の小袴を身につけていた。

渡りと呼ばれたその男は、音も無く、すっと縁側のほうへ近づき、縁側の下で、片膝をつき頭を垂れた。

平安の都の夜は深く、ゆったりと時が流れる。

灯りは月明かりのみ。

幻想的な夜である。

神を祭る祭壇の前に座っていたその女は、静かに立ち上がった。落ち着いて見えるが、歳は、十七、八といったところか。

白の単に緋色の袴をはき、月明かりに照らされた豊かな黒髪は、例えようもない光を放っていた。

巫女の姿に美しい顔立ち。

そして、その黒い瞳は遠くをしっかりと見据え、その意志の強さを物語っていた。

彼女は几帳の前で、また座った。

「そこでは、遠い、近くへ」

それを聞き、渡りは音も無く板の間へと上がり、几帳の前で先ほどと同じ姿勢で片膝をついた。

二人は几帳を挟んで向かい合う。

「都の様子は、変わりありませんか？」

その小さく放たれた声は、確実に渡りの耳へ届く。

「はい、姫さま。」

「もう、姫などではない。わたくしは、神にお仕えすることにしたのです。」

少々、きつい口調だった。

何かを振り切ろうとしているように聞こえる。

渡りは「はい」と短く答えた。

もう十年くらい前になる。

ちょうど、庭一面に桃の花がさいていた。

姫と呼ばれた、加賀美^{かがみ}の母が亡くなった。

大納言のお渡りを待ち焦がれつつ、病で亡くなった。

加賀美は大納言の六の姫であり、正妻の姫ではない。

母の実家は貴族とはいえ、低い階級の家柄で、加賀美を引き取らなかった。

そのため、正妻の実家に遠慮した大納言はこの屋敷で神官をしていた者に、姫を預けた。

そして、いつか自分の出世の為、宮中へ出仕させるつもりであつたらしいのだが、その大納言も一昨年の流行り病でこの世を去った。

現在は正妻の兄が家を継いでいる。

宮中への出仕の誘いもあったのだが、加賀美はそれを了承しなかった。

そればかりか、父が亡くなってすぐに巫女となり、神に仕えることにしたのだった。

巫女になる決心をするには、宮中への出仕の拒否、そして、もう一つ理由があった。

彼女には他人には無い、ある能力があった。

決して、自らそれを望まなくとも、様々なものが見え、聴こえる。一時はそれに振り回され、物の怪にとり憑かれたのではないかと、憔悴したことがあった。

しかし、巫女となり、少しはその能力を操ることができるようになった。

その能力は悲しいことですら、彼女にわからせる。
容赦はなかった。

大納言が亡くなって間もなくのことである。

ある日、出かける神官を見送ったとき、なぜか、「もうお帰りはなるまい」と悟った。

「お気をつけて」という声がすでに震えていた。
涙が止まらなかった。

やはり、出かけられた先で、突然お倒れになり、帰らぬ人となられた。

その後も、失せ物や病氣の見立てなど、相手を見たとき、様々なものが見える。

しかし、そのようなことが兄に知れば、どのようなことになるか。

身分制度の厳しいこの時代に、呪術師まがいの者がいるとなれば、恥となるう。

だから、加賀美は自分の能力をあまり他人には、知られたくなかった。

そんな中、彼女の能力を理解し、貴族の争いから彼女を守ってきたのは、亡くなられた神官と神官に仕えていた、下働きの渡りだった。

一月ほど前、加賀美には不思議な声が聞こえた。それは、もうすぐある一人の姫が現れるという。この名は「月の姫」。詳細はわからない。加賀美としてはその兆候がないか、都の様子を渡りに調べさせたというわけだ。

「宮中も今のところかわった様子はないようです。継俊つぐとしさまに文で確かめています。わたくしの取越し苦労であればよいのだけれど。

「

継俊は父方の従兄にあたる人物で、彼とは幼い頃から仲が良かった。彼もまた、加賀美の能力を知っていて、彼女の味方だった。

「この満月を見ていると、わたくしは不安になる。月の姫とはどのような姫であろうか。近頃の貴族のありようを考えると、気持ちが悪くなる。私利私欲に走る者も多く、民は苦しんでいる。月の姫とは……。」

「あまりお考えにならないほうが。加賀美さまのお味方はおりますゆえ、ご安心なさいませ。都が那良ならより遷都されて二十年、まだ庶民の暮らしは困窮致しております。貴族の方々のお振る舞いも目に余るものがございます。しかし、それは帝もお気づきのことだと思います。」

そこまで語ったとき渡りは、はっとした。少し、口が過ぎたと思ったのだ。帝、という言葉をも身分の低い者が口にするなど到底考えられなかった。

しかし加賀美はそんなことなど気にもかけず、

「ありがとう。わたくしがこれではいけませんね。時は来ましよう。ゆっくりと待つことに致しましょう。」

と冷静に語った。

宮中にいれば庶民の暮らしなどわかりはしない。

加賀美はたまに都に出て、庶民の暮らしを見ていた。

貴族の横暴な姿や役人の強かな振る舞い、それに苦しめられている庶民の暮らし。

自分にはどうすることもできないのだが、それでも気になってしまふ。

几帳が風に揺れる。

風が重い空気を運んでいったようだった。

「それより、たまにはお忍びで都の裏の様子でも見にいきませんか。この渡りがご案内いたします。」

「まあ、珍しい。渡りから誘うなんて。何かわたくしに見せたいものがあるのね。」

加賀美の声が軽やかになった。先ほどの、あの夜を滑るような声とは違っていた。

「姫さまには叶いません。」

渡りも少しおどけたように笑みを浮かべる。

例え几帳越しでもその様子は、加賀美には手に取るようにわかった。

渡りのほうも、それは重々、承知の上だ。

都の外れ、その男の粗末な小袴は見るも無残に汚れていた。

歳の頃は十五、六といったところだろうか。ばさはさになった髪は一つに束ねられてはいるものの、それが返って薄汚れてみえた。

何をしているのか、まともな仕事をしているようにはみえない。目は獲物でも追っているかのように、ぎらりと光っていた。

都はここ三年続いた飢饉のため、餓死者や浮浪者を多く抱えていた。中心部は貴族たちが牛車を動かすため役人を使って排除していたが、中心地から少し離れたところでは、屍しかばねや浮浪者がいたところにいたのである。

この男はその屍を捜しているところだった。

役人は目立つところの屍しか運ばない。

そのため、この男のように屍を捜しては運び、その報酬を得る者がいた。

彼は屍しかばね運びの蓮れんといった。

このあたりじゃあ、ちょっとは知れた男だった。

「ちえつ、なんでえ、生きてやがる。死んだらすぐに運んでやるからな。」

野草や山菜を売っている女の横でじつとして座っている老人の顔を覗き込み、蓮は言葉を吐きかけた。

横にいた女はぎよつとした目で、蓮を見た。

「なんでえ、なんでえ、おいらがよつぽど酷いことしてるみたいじゃねえか。おいらはよ、ちゃんとあの世ってところへ行けるよう、屍置き場に連れてってやろうってんだ。あそこじゃあ、三日に一度は坊主らしき奴がきて、加羅渡りの経とやらを唱えるんだ。ありがてえ話だよ。経とやらを聞くと極楽ってえところ行けるらしいぜ。」

蓮は自慢げに話した。

野草売りの女は聞こえないふりをして、目を逸らす。

このあたりじゃ、蓮は乱暴者の札つきで通っている。関わるどころでもないことになるのは、目にみえている。

坊主だって役人に頼まれて経を唱えるわけではない。

もともと国家を纏めるため、加羅の国より取り入れた宗教だ。気の利いた身分の高い者は仏教の教えを学び、高級な役職に就き寺などを与えられ庶民を先導してきた。当然それに反発し本当の教えを説こうとする者もいるわけで、報酬などとは別に人を助けようと修行僧となり、経を唱える。貴族や役人は報酬など与えはしない。貴族たちにとって死んだ人間など、どうでもよいのだ。死んだ人間からは何も取れはしない。

仕方がないので屍を片付けた蓮たちに、ほんの一握りの粟や稗を

やる。そうすることにより都の清掃を行い、少しでも疫病が増えるのを阻止したかった。

蓮たちは蓮たちでそれを生業とし、その微々たる報酬で生計を立てていた。

「ふんっ、どうせおいら達は人間のうちに入ってねえよ。お偉い奴だけが得をする世の中だよ。」

蓮は不平不満を撒き散らしながら、小石を思いっきり蹴った。その小石は歩いてきた少女の足を直撃した。普通の人間が蹴ったものではない。ましてや蓮が怒りを込めて蹴った石だ。当たれば痛い違いない。だが、蓮の悪いことに当たってしまった。

少女は「痛いっ、」と言って足を抱えてその場に座りこんだ。

「・・・ああ、今日はどうしてこう間が悪いんだ。」

蓮は吐き捨てるように言った。

そしてその娘に駆け寄る。

「・・・大丈夫かい？」

娘は涙を堪えて頷いた。

「悪かったな。」

蓮が娘の足をみると、そう酷い傷ではなかったが血が出ていた。蓮は横の野草売りの女を睨みつけると、

「何か、拭いてやるものを持ってねえか？おいらの小袖じゃあ汚れてて傷の手当にもならねえや。」
脅しつけた。

野草売りの女はそういうことならと、後ろにある籠の中から一枚の布を取り出した。

「ありがとよ。」

そう言つて蓮は娘の足の手当てをしてやつた。

この頃、布は貴重なもので庶民は自分の衣を持つのがやっとだった。ましてや染めた布で出来た衣などは貴族しか着ることはなかった。

「よし、できたぞ。もういいだろ、早くあっちへ行きな。」

蓮は片手を振り、娘を追い立てた。

しかし、娘はそこを動こうとはしない。

着物は古く粗末な小袖ではあったが、汚れてはいない。

顔はきりつとして、気が強そうだ。

蓮は自分とあまり歳は違わないと思った。

「どうしたんだい、あるけねえのかい？」

娘は首を横に振った。

「なにか言わねえと。わかんねえよ。」

蓮の言葉にその娘は大きな声で言った。

「わたし、そこのお爺さんを連れて帰りたい。」

蓮は面食らった。

「ほつといても、もうじき死んじゃうんだぜ。おめえの爺さんかい？」

娘はまた首を横に振り、

「わたしは、真照寺しんしょうじという寺にいたのですが、その尼様に育てられました。今、尼様は死にかけている人を連れてきては、穏やかな気持ちであの世へ行けるよう、体を拭いてやり手を握り、経を唱えてやるのです。なので、そのお爺さんを連れて帰りたいのです。」

蓮は鼻で笑った。

「おれは、屍しか運ばないんだ。あの爺さんはまだ生きてやがる。第一、その尼さんとは商売敵だぜ。その寺に運べば、おれの稼ぎは減るんだ。なんで、おれが損するようなこと、しなきゃなんなんだ。おれは、その爺さんが死ぬのを楽しみに待ってる奴だ。」

それを聞いて、気の強そうなその娘はそれを押し殺すように、涙を流してみせた。

「……でも、わたしには運べません。足も怪我をいたしておりますし……。」

娘は蓮に手当てをしてもらった足を痛々しそうに撫でた。

「……、わかったよ、運べばいいんだろ？」

とんでもない娘に関わったものだと思った。

あんな気の強そうな娘が涙なんて流すはずもなく、傷だってそんなに深くはない。ほんのかすり傷だ。優しくなんてしなればよかったと蓮は後悔した。

蓮はあたりを見渡した。屍を運ぶための板に小さな木の車をつけた道具は持っていた。しかし、生きた人間を運ぶとあれば、話は別だ。死体は少々傷をつけても文句は言わない。ところが、生きた人間となれば、引き摺るわけにはいかない。

「ちえっ、面倒だな。」

と、困っているところに、

「兄貴、なにやってんすか？」

これまは小汚い、蓮より随分小さい男がやってきた。歳も蓮より二、三歳下のようにだ。

しかし、蓮のようなとげとげしさは感じられない。

「おう、ちょうどいいところへ来やがった。」

蓮は嬉しそうに手を叩いた。なかなかいい。

「おめえ、この爺さん運ぶからよ、手伝ってくれねえか？」

その小男は爺さんの顔を覗き込むと、不思議そうに蓮を見ると、

「兄貴、この爺さんまだ、生きてやすぜ。」

と悪気もなく、さらりと言った。

「そんなこたあ、分かってるよ。ただ、このお譲ちゃんが、その爺さんを連れて帰りたいんだとよ。」

蓮は呆れた様子だ。

「へえ、珍しい人もいるもんだ。いいつすよ。今日は仕事も終わってるし、兄貴に付き合っても。」

そう言って、その小男はひょうひょうとした様子で、鼻を擦った。

「じゃあ、話は早えや。おめえ、爺さんの足を持ちな。おれが頭のほづを抱える。いいな。」

二人は爺さんをひよいと抱え、蓮が持ってきた板の上に乗せ、二人で抱えた。もう、餓死寸前の爺さんであつたから、体重など感じられない。かえって、蓮が持ってきた板のほづが重いくらいだ。

「で、その何とかって寺は何処にあるんだい？案内しろよ。」

蓮は娘に向かって言った。

「西のはずれにあります。ご案内致します。」

娘はさっさと歩き出した。足が痛いようには見えず、さっきまで

涙を流していたのが嘘のようだった。

「まったく、現金な野郎だぜ。」

蓮は娘に聞こえるよう、わざと大きな声で言った。

その娘を先頭に、頭のほうを抱える蓮、そして足のほうを小男と三人は縦に並んで歩き始めた。

「ところで兄貴、その娘さんは何て名なんです？」

「おれも知らねえよ。」

蓮のぶっきら棒な答え方に反応するように、娘は答えた。

「由衣です。」

運び始める前とは違い、はっきり答えた。気の強さは隠せない。

「へえ、おいら九こつてんです。九番目に生まれたから九です。今、土塀修理屋のお婆おばのところこゝで世話になってます。都の南のはずれです。兄貴もそこにいるんすよ。」

九というその小男は娘に向かって、大きな声で言った。いかにも人の良さそうな男である。

「へつ、九、人が良いのもいい加減にしといたほうがいい。あんまり人がいいのは馬鹿ばかつてんだよ。」

蓮はふてくされたように言った。

九とは三年ほど前に会った。人懐こい性格で、蓮を恐れることなく、本当の兄貴のように慕ってくる。今、九が言ったように住むところも無い蓮に土塀修理屋のお婆を紹介し、連れていったの九だ

った。

九はそこで、職人をしている。

「いつもの兄貴じゃないですよ。だって、いつもだったら生きた爺さんなんか運ばないと思ひやすぜ。」

「まあな、それがどうしてか、こうなっちまいがったのさ。」
ふたりは他愛もない話をしながら、由衣という娘の後ろについて行った。その間、由衣は彼らの話に興味が無かったのか、それともあえて話さなかったのか、黙りこくったままだった。運んでいる爺さんのほうも当然といえば当然だが、何も言わず、目を瞑ったままだった。

少し日が西へ傾きかける。

三人、いや、爺さんも含めて四人は夕陽へ向かっていつの間にか無言のまま、歩き続けた。

どのくらい歩いただろうか。いくら爺さんが軽くても、そろそろ二人とも手が疲れてきた。

「まだ、つかねえのかよ。」
蓮が痺れをきたして言った。

「もうすぐです。ほら、あそこに竹藪が見えるでしょ。あそこにある、あの寺です。」

由衣は竹藪を指差した。夕陽が邪魔でよく見えなかった。竹藪は見えるものの、肝心の寺らしき建物が見えない。

「よかったつすね、兄貴。もう、おいら手が痺れて、足も痛くて、くたくただ。」

九は前方をよく見もせずと言った。

「何、言つてやがるんだ。そんな寺なんかあるのかよ。夕陽が眩しくておいらにはよく、見えねんだが。おい、おめえ、物の怪じゃねえだろうな。」

由衣はくすりと笑った。

「蓮つて、以外に臆病なんだ。本当に物の怪なんていると思つてるの？」

由衣にそう言われて、蓮は顔を赤くして、かっとなった。

「馬鹿にするんじゃないよ。物の怪が怖くて屍運びができるつてんだ。」

「そりゃ、そおつすね。蓮の兄貴には怖いものはありやせんよね。」

九は真面目に言った。

蓮はこの娘に騙されているような気がしたのだった。都のはずれといつても、寺までは相当遠い。なのに、娘が、それも一人で運ぼうとしていたのが、納得できなかった。本当に物の怪ではないかと、蓮は柄にもなく疑っていた。

「ここです。」

竹藪のところまで来たとき、由衣が静かに言った。
それは荒れ果ててはいたが、確かに寺だった。

「まあ、由衣。何処に行っていたのですか。」

寺の門を潜るなり、一人の尼が心配そうに由衣に声をかけた。

「申しわけありません。都でこのお爺さんが倒れていたので連れてきました^{さいせいに}が、西清尼さまは？」

由衣の言葉を聞いて、その中年の尼は爺さんに気づいたらしく、「奥にお連れしなさい」と由衣に言いつけ、すぐに西清尼を呼びに行った。蓮と九は由衣に言われるまま爺さんを、奥へと運ぶ。

そこは、土間の上に蓆が敷かれた簡素なところだった。すでに二人ほど、もう助からないであろう人間が横たわっていた。由衣の指示でその横に運んできた爺さんを蓆の上に寝かせた。そして、爺さんの体を拭いてやるための湯を沸かしてくると言っで、由衣はその場を離れようとした。

「もう、いいだろう？おいらたちは、帰るぜ。」

蓮は早くこの寺を立ち去りたかった。第一、蓮に人助けは似合わない。そのことは蓮自身が一番よくわかっていた。

「待つて、もうすぐ西清尼さまがいらっしやるから。会っていつて。物の怪などではございせんから、ご安心を。」

由衣は蓮の心の内を見透かしたようにからかうと、その場を去った。

「兄貴、これは一本取られましたね。」

九からも笑われ、よけい蓮は機嫌が悪くなった。

そこへ西清尼とおぼしき尼が、先ほどの中年の尼に連れられてやってきた。

西清尼は年老いた尼で、少し腰が曲がっていた。そして皺の寄ったその手には、粗末な数珠が握られていた。

「由衣がご迷惑をおかけ致しました。今日わたくしの使いを頼み、都に出したのですが、あの子ときたら、あなたがたにまでご迷惑をおかけしたようで。」

「いえいえ、人の役に立ったのなら、おいら、迷惑なんてありません。」

蓮より先に九が嬉しそうに答えた。

「おいらは、迷惑だな。」

蓮は面白くなさそうに、口を尖らせた。

「へんだろ？もう死んでいくんだぜ。助かりもしねえ、そんな人間に何かしてやって、あんたに何か得なことでもあるのかい？」

西清尼はその年老いた顔に、少し笑みを浮かべた。

「正直なかたですね。本当に死んでいく者は何もわからないのでしょうか？最後に見るものは何なのか、それを持って極楽浄土へ旅立つとしたら・・・？」

そう言うつと西清尼はしわがれた手で、蓮の手を握った。思わず、蓮は手を引つ込めた。

「幼い頃は皆、母に手を握られたものです。」

「おいらは捨てられたよ。親の顔なんて見たこともねえよ。」

西清尼はまた少し笑みを浮かべた。

「由衣もそうでした。皆、そのような者たちばかりです。でも、懸命に生きようとしている。そして、その傍らで、死を迎えようとしている者もいるのです。どんなに偉い貴族であっても、死は与えられます。」

いかにも、尼の言いそうなことだ。いつもの蓮ならば屁理屈の一つや二つ調子よく出てくるのだが、どうもこの年老いた尼は苦手だ。調子が狂う。

「ちえつ、いつもと違うぜ」と心の中で蓮が毒づいたとき、九が尼に手を合わせながら、涙を流し始めた。

「おいら、……うれしいっす……仏様だあ。」

「九、おめえ本当にいい奴だな。でもおめえは単純すぎるんだよ。」

そう言いながら、九のあまりの感動に冷めた視線を送りながら、蓮は何だか釈然としないものを感じ、苛苛した。

しかし、西清尼のほうはさして気にした様子もなく、「もう、そろそろ日が暮れます。早くお帰りなさい。そしてまた、いつでもいらして下さい。」とやさしい笑顔で合唱した。

二人が、塹である土塀修理屋のおばばの家に辿り着いたのは、もう日がどつぷり暮れてからのことであつた。なんとか月明かりを頼りに、家に辿り着いた。

「二人揃つて何やつてんだい？もう、おてんとう様は何処にもいやしなしよ。物の怪にでも喰われちまったのかと思つたよ。ま、あんた達を喰うような物の怪なんていないだらうけど。間違つて喰つたら、腹壊しちまうよ。」

そう言つておばばは豪快に笑つた。

「早く、夕飯、食べておくれよ。本当に、片付きやしないよ。」
稗と粟に雑草ともつかないものが入っている雑炊を、二人の前に出した。

おばばのところの職人は九以外は通いであつたので、おばばの家の離れに住んでいるのは九と蓮の二人だけだつた。

もともと土塀修理屋はおばばの旦那がやっていた仕事だつたが、先の流行り病で、親方である旦那が亡くなり後の仕事を九たち職人を使つて、おばばがやっているのである。おばばとはいつても、全体の髪は黒く、ところどころに白髪が混じっている程度だ。この時代、五十が近いとなれば、おばばと言われても仕方が無い。だが、本人はちつとも気にしていないようだ。むしろ、おばばと言われたほうが、迫がつくと思つているらしい。たしかに、彼女には言いよりの無い迫力がある。

九は出会つた娘のことや、寺の尼のことなど雑炊を口にかき込みながら、必死に話した。そして、話が終わるまでに、五杯の雑炊を腹に入れた。こんなに食べながらこれだけの話ができるのは、いろいろな人間を見てきたが、九しかないと言つて蓮は呆れた。

蓮は黙ったまま、二杯食った。

「お前たちが会ったその尼さん、近頃じゃあ評判だよ。死んじまつて経を唱えるのが普通だ。ところが、死ぬ前から極楽へ行けるんだって、最近じゃあ、その寺に寄付する者もいるくらいだ。でも、たくさん持つて行っても、少ししか受け取らないらしいんだ。だから、あの尼さんは本物だって、みんな拝んでるよ。」

「へえ、兄貴は物の怪だって思ったらしいけど。」
九はいつものひょうひょうとした様子で言った。九は嘘がつかない。

「物の怪だつて？冗談じゃないよ。本物の仏様だつて。」
おばばは胸を張って言った。おばばも九と同じで、嘘が嫌いで、正直者である。

おばばは二人が食べ終わるのを見ると、茶碗をすぐに片付けた。

二人は離れへ行き、自分たちの寢床に入った。九はすぐにいびきをかきはじめた。

しかし、蓮はなかなか寝つかれなかった。今日会った由衣という少女の顔、そして、自分が連れて行った爺さんの姿、西清尼のしわがれた手、声、言葉、全てが脳裏に焼きつけられ、幾度寝返りをうっても寝つくことができない。それどころか、ますます、いろいろな事が頭の中を駆け巡る。今までに無いことだ。眠りが来ない。ようやく空が白みはじめたころ、蓮はやつこの思いで眠りについた。

それから数日後、都で聞き覚えのある声に呼び止められた。

「……蓮？」

蓮は振り向く。それは先日こき使われた相手だった。

「……由衣か、また、何のようだい？おれをまたこき使おうって魂胆じゃねえだろうな。」

「ごあいさつね、そんなんじゃないってば。あんた、屍運んで稼いでるんだろ？この前は悪かったよ。」

由衣は素直に謝った。その姿はこの前の拗ねた印象とは、随分違っていた。

「それなら今日はこんなところで何やってるんだい？」

今日は用事をいいつけられそうもないので、蓮は由衣に安心して尋ねた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2405z/>

月語り - 花の章-

2011年12月20日17時50分発行